

小林信彦

極東 セレブ デート



朝日新聞社

極東 レネ デール 信彦

朝日新聞社

極東セレナーデ（下）

1987年4月30日 第1刷

定価 1000円

著 者 ☆ 小林信彦

発行者 ☆ 八尋舜右

印刷所 ☆ 図書印刷

発行所 ☆ 朝日新聞社

編集・図書編集室
販売・出版販売部

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話・03-545-0131 振替・東京 0-1730

©NOBUHIKO KOBAYASHI 1987 ISBN 4-02-255687-0

Printed in Japan

☆ 目 次 ☆

第七章 権威なき時代

3

第八章 珍人類

35

第九章 毘

90

第十章 表層浮遊

131

第十一章 甘い香り

152

第十二章 事 故

182

終 章 青山通り

257

あとがきに代えて

277

著者インタビュー

281

極東セレナーデ
(下)

第七章 権威なき時代

1

ファースト・クラスの座席に案内された利奈は、気分がよかった。スチュワーデスは目一杯、愛想をふりまき、「ニューヨークはたのしかったですか」などとお世辞を言ってくれる。

利奈は禁煙席の通路側の座席を指定したのだが、シートの大きくて、すわり心地の良いことといいたらない。すぐに、セーターを脱いで、軽装になった。

伊吹は右側の喫煙席にいる。煙草をすうかすわないかの関係で、伊吹と離れたシートにすわれたのは、まことに喜ばしい。あんな脂ぎった男と隣り合わせではリラックスできやしない。

シート・ベルトをしめて、日本の新聞を手にする。小さな記事ではあるが、日航機墜落事故関係のニュースが出ている。

〈墜落〉の二文字を見ると、利奈は落ち込み始めた。

（なんのために、わたし、ニューヨークにいたんだろう）

飛行機が離陸するときのいやな気分のなかで彼女は呻いた。

（はじめにリポート書いたのも、まったく、意味がなかったらしいし……）

やがて、シート・ベルト着用のサインが消えた。

——にもかかわらず、「当機、これから、気流の悪いところを通過いたしますので、お座席ではベルトをおしめになっていてください」と女性の声でアナウンスされる。

（何なんだ？）

利奈はわけがわからない。

それならば、「ベルト着用」のサインを消さなければよいのである。

通路をへだてた右側に、テレビの刑事役専門の中年の男優がいて、座席の背を倒し、足をのばしている。

（あれは楽そうだ）

まず、座席の背を倒してみた。とても気持ちがいい。

よく見ると、中年男優の足は高いところにある。どういう仕掛けなのか、椅子がベッドみたいになるらしい。

利奈はシート・ベルトをゆるめて、椅子の下に入っているカタマリをひっぱり出そうとした。——ところが、ちょっとやさっとでは、動かない。

「出てこい、出てこい」

ぴくともしないのである。

ひっぱったり、叩いたりしているうちに、シートと同じ色のカタマリは、ものすごい勢いで飛び出てきた。

あやうく、手に怪我^{けが}をするところだったが、カタマリはシートと同じ高さで一つ^{ひと}つながりになり、足をのせることができた。

隣の窓ぎわの席に居るのは、神経質そうな白人の中年女性である。バッグから大きなミネラル・ウォーターの瓶を出して、ハンカチをしめらせ、眼にあてている。

スチュワードからシャンペンのグラスを受けとった利奈は自分に乾杯した。

これから何がおこるか、楽観は許されないが、とにかく、いろいろと面白かった。お金の心配がなくニューヨークに滞在できて、一九三〇年代のフレッド・アステアやケーリー・グラントに会うことができた。いろいろ文句はつけたものの、ミュージカルはだんトツで、すばらしい。日本のミュージカル（というものがあると仮定しての話だけでも）なら主役を張れるような伎倆^{わざづ}の持ち主が、アメリカには無数にいて、あちこちのオーディションを受けているのだ。

（日本人がミュージカルをやるうってのは、アメリカ人が歌舞伎をちゃんとやるうとするようなものだ）

シャンペン・グラスを空にしながら、利奈はうなずいた。

（そういうことなんだ）

やがて、食事がサーブされる。

利奈は和食のコースをオーダーしていたが、オードブルのワゴンがきて、キャビアやフォアグラはいかがですか、とすすめられると、食べてみたくなかった。

「一通り、おとりしましょう」

親切なスチュワードスはにっこりして、和食の前菜といっしょにキャビア、フォアグラ、エビを皿に盛ってくれた。

レモンを絞ったキャビアは、なかなかの味だった。

(ニューヨークでは、ろくなものを食べなかった……)

ひとりで入ったステーキ屋の肉は、靴の底革みたいだった。

こういう感想をもらすと、あなたは真のニューヨークの味を知らない、と叱られそうなので、口にしなかったのだが、本当にうまくかったのは、最初にとまったホテルの朝食と、木村と行った日本料理屋だけだった。あとは、どれも、ひどいものである。めぐり合わせが悪かったのであろうか。

シャンペンを注いでもらった利奈はゴキゲンになった。往きの飛行機のきゆうくつきにくらべて、帰りは王侯貴族のムードである。イヤホーンをつけて、音楽をきこうとすると、

——毎日こうだと、こりや泣けてくる……。

という歌声が入った。パンフレットで見ると、〈懐しの歌声〉のチャネルの植木等の歌らしい。

(やー、ほんとに、毎日、こうであって欲しい)

和食のコースは、一見、豪華に見えたが、食べてみると、それほどでもなかった。これだったら洋食のほうがよかったと後悔しながら、利奈はパサパサの日本そばを、なんとか呑み込んだ。スチュワードが注いでいった緑茶が救いであった。

食事が終わると、映画が上映される。

劇作家のニール・サイモンが脚本を書いたコメディで、利奈はニューヨークで見ていた。

伊吹を見ると、書類を見ながら、盛大に葉巻のけむりを吐きあげている。仕事人間とか仕事の鬼と呼ばれるにふさわしい勤勉さだ。

(いやなタイプだな)

利奈は思った。

（氷川秋彦にはどこか滑稽なところがあるけれども、あの男には、それさえない……）

利奈の直感がいかに鋭いかは、この物語を最後まで読んでいただければ納得されるはずだが、この時点では、まだ、利奈自身にさえわかっていない。

（木村さんは、いま、何をしているだろう？）

彼女は座席の背をぎりぎりまで倒して、眼をつむった。イヤホーンをつけ、チャンネルをまわすと、昔なじみの声が響いた。

（おっ、達郎だ！）

残念ながら、機内の音楽は、山下達郎だけではない。うっとりしていると、たちまち、終わってしまい、利奈の好まない歌手の声にかわる。

チャンネルをまわすと、ディスコ・サウンド、ど演歌を経て、なぜか、桜井長一郎の声色こゝろになった。

（これなら、眠れる……）

利奈は、よくやく、うとうとした。

……やがて、眼がさめたときには、映画が終わっていた。機内は暗く、ファースト・クラスのはぼ全員が眠っている。さすがの伊吹も眼をつむっている。

腕時計を見ると、約二時間眠っていたことになる。

のどの渴きをおぼえた。ふりかえると、ミニ・バーの脇にスチュワードがいた。

利奈が片手をあげると、スチュワードが近づいてきた。

「ペプシをください」

と利奈は言った。

「はい……」

と答えるスチュワードは、さっきの人とちがう。しかも、どこかで見たような顔である。すぐに、ベ
ブシ・コーラを持ってくると、秘密めかした小声で、「お暑いですか？」とたずねた。

想い出した！ 往きの機内で同じ質問をしたスチュワードだ。

「実は、エコノミー・クラスの方の外人のかたが、機内が異常に暑いとおっしゃいまして……」

「ニューヨークが寒かったからだと思います」と利奈は答えた。「わたしはセーターを脱いだから、平
気です。自分で調節しないと」

「なるほど。安心いたしました」

と答えながらも、スチュワードは不安げであつた。

あと一時間で、東京国際空港に着くという時、眠っていた利奈は揺り起こされた。

「ほ？……」

利奈はぼんやりしている。

「着替えるんだ」

伊吹の声に利奈はびくんとした。どうも、この男は苦手だ。

「ええっ？」

思わず、相手を見あげると、伊吹は利奈の顔に葉巻のけむりを吹きつけた。

狭いファースト・クラスの場合、禁煙席と喫煙席はきわめて接近している。禁煙席に踏み込んで煙草
をふかす野蛮な男もたまにはいるが、伊吹はさらに厚かましい。

「トイレで着替えるんだよ」

そう言って、伊吹は紙袋をさしだした。利奈がのぞくと、男物のジャンパー、ズボン、おしやれなサ

ングラスなどが入っている。

「これ、わたしが着るんですか」

「そうだ」

伊吹は当然のように言う。

「どうして？」

「芸能リポーターどもが空港に押し寄せる。そこを突破するためには、これしかない」

「男の恰好するんですか」

「うむ。ほかの仕掛けもしてあるが、念のためだ」

「このズボン、長過ぎますよ」

利奈は拒否しようとする。

「長過ぎたら、裾をまぐればいい。……早くするんだ、時間がない」

利奈は仕方なく立ち上がり、袋を片手に化粧室に入った。

男ものを着るのは初めてである。変装をする快感といったものもなく、サングラスをかけて、ヤンキーズの名入りの野球帽をかぶると、とんと、色物芸人である。

（やっだあ、こんなの……）

サングラスと野球帽を紙袋に戻して、化粧室を出る。

立ったままでビールを飲んでいる伊吹は、

「なかなか似合う」

と、冗談ではなく言った。利奈は、むかっとしたが、我慢しようとする。

「もう少ししたったら、エコノミー・クラスの空席にすわりなさい。なんとかなるだろう、あとは……」

謎のような言葉をつぶやく。

「エコノミーのほうへ行くんですか」

「うむ。朝倉利奈がファースト・クラスに乗っていることは、おそらく知れわたっている。はっきりいえば、氷川さんが情報をリークしたのだ。きみの帰国を盛り上げるためさ」

利奈は呆れている。

「私もエコノミーのほうへ行き、きみといっしょにおりる」

乞食王子風の利奈は、伊吹につれられて、エコノミー・クラスの座席にうつった。

エコノミー・クラスは、座席がせまく、人間がごちゃごちゃしている。そのごちゃごちゃした中から、一組の男女が立ちあがり、伊吹のそばにきた。

利奈はびっくりした。

カップルの女の方は、ヘア・スタイルから服装まで、利奈にそっくりである。背は利奈よりだいぶ高く、素通しらしい眼鏡がいかにもタレント風である。男のほうは、ノー・ネクタイで、女のバッグを持ち、いわゆる「ヘマネージャー風」である。

「スチュワードに話してある。この席にすわっていてくれ」

伊吹はファースト・クラスの搭乗券二枚を男にわたした。

二人は前方のファースト・クラスのほうへ歩いてゆく。

「あの女はきみの替え玉だ。ヘジャパン・フェア」を手伝いに日本からきてくれたスタイリストだよ。男はうちの社の人間だ。どうせ、すぐに、バレることだが……」

成田空港のゲートにおり立った利奈は、テレビカメラを抱えた男たちが走ってゆくを見た。その狂

暴さは予想以上で、伊吹の仕組んだことが大げさではないことがわかった。

「報道用の腕章さえつけていれば、こんな奥まで入ってこられる。報道とは名ばかりの、芸能リポーターどもだ。チェックが世界一きびしい成田空港で、あんな奴らが野放しにされていて、いいのかね」

伊吹は不快そうに言い、利奈と二人でゆっくり歩きだした。

「スタイリストは茶目っ気のあるひとで、面白がっている。彼女が空港の中をあちこち逃げまわっているあいだに、われわれは脱出できるというわけさ」

「うまくいくかな」

利奈は不安である。利奈と伊吹は、いちおう、航空会社でのV・I・P扱いにはなっているのだが、だからといって、税関が扱いを優先してくれるわけでもあるまい。

飛行機からおろされた荷物がベルトコンベアに乗って出てきた。利奈のスーツケースはすぐにわかった。

「きみ、先に税関を通ってくれ」

自分のスーツケースが見当たらないのに苛々した伊吹はささやいた。

「税関を抜けると、出口に迎えがきている。ハイヤーの運転手だが、きみの顔を知っているはずだ」

「変装しているのに、ですか？」

「大丈夫だ。先に行ってくれ」

利奈はスーツケースを押して税関のカウンターに近づいた。さいわい、カウンターは空いている。

「ニューヨークからですか」

税関の男は鋭い眼つきで利奈の全身を見まわした。やましいものを所持している人間は、この眼光に思わず、うろたえるのだが、ポルノ・ビデオも大麻も持っていない利奈は、べつに、という感じで、

「ええ」

と、答えた。

「ま、いいでしょう」

パスポートを投げだしながら、男は言う。

日本の税関に初めて接した利奈は、いいでしょう、の意味がわからない。

「はあ？」

と、ききかえすと、

「早く行ってください。あとがつかえている」

男は居丈高いだけだかに言い、利奈はパスポート、機内用バッグを抱えて、スーツケースを台からおろした。

（ほんと、情けない！）

野球帽にサングラスという怪しい姿で、よくも、スーツケースをあけて、と言われなかったものである。バッグを肩からかけ、スーツケースをひっぱって、出口に出る。

出迎える顔が無数にあった。これじゃ、ハイヤーの運転手なんて、わかりやしない。

「ぼくだ、ぼくだ」

という声がした。

ぼくだ、はおかしいと思って、ふり向くと、西田実である。

「向こうに車がとめてある。急いで、急いで」

西田は利奈のスーツケースをさげて走りだした。

「ども。しばらくですな」

利奈は車に乗りながら挨拶をした。

「ハイヤーの運転手がきみの顔が判らないとかで、氷川さんに呼ばれてきた。奇遇でもなんでもない。……ヤバイ、芸能リポーターたちがくるぞ」

ふりかえると、がっかりした顔のリポーターたちがやってくる。替え玉の正体がバレたのだろう。

「おっ、昔の映画スターがいる」

西田は小声で言った。ファースト・クラスで利奈のそばにいた中年男優がスーツケースを片手に立っている。芸能リポーターたちは二十年以上まえの二枚目には興味がないらしい。

「おい、きみたち！」

中年男優が、突然、大声をあげた。

「きみたちが探している獲物はここにおるぞ！」

テレビの刑事役そのままのポーズで、利奈を指さした。

芸能リポーターたちは、一瞬、ぎょっとしたが、ただちに、しゃにむに、利奈が身をひそめている車に殺到した。フラッシュが焚かれ、ドアが荒々しく叩かれた。

「てめえら、轢き殺すぞ！」

うなるようにつぶやいて、西田は車をスタートさせた。

芸能リポーターたちは、なおも、追いつがろうとする。身体ごと、ぶつかってくるカメラマンもいる。いきなり、西田は灰のようなものを詰めたビニール袋をとり出し、外に向けて激しく振った。

外の男たちの顔も、カメラも、灰でおおわれ、さすがに立ちすくむ。その隙に、西田は思いきり、スピードを上げた。

「大丈夫かしら」

利奈が心配そうに言うのと、